

アメリカ経営学のリベラルアーツ^{*1}

肥田 日出生

=目次=

はじめに

第一部 流通・マーケティング学の認識哲学

1. ウィリアム・ジェイムズ
2. パースからの啓発
3. ベルグソンからの恩恵～創造的進化と感性主義～
 - 3-1 欧州の存在論～法則主義～
 - 3-2 法則主義と対極の存在論
 - 3-3 实在認識は感性で可能
 - 3-4 概念認識はアバウトな認識
 - 3-5 ウェーバーの「するどい概念構成」を補填
4. ジェイムズの「プラグマティズム的」展開
 - 4-1 事例的知識と法則的知識に価値の上下なし
 - 4-2 パースペクティブ
 - 4-2-1 全体を一度に思わせるもの
 - 4-2-2 意味と価値を分与する
 - 4-2-3 パースペクティブは層をなす

第二部 アメリカ経営学のリベラルアーツ

5. 自由吟味方式と教理統一方式
 - 5-1 ジェイムズ哲学の要約
 - 5-2 キリスト教には二つの活動方式がある
 - 5-2-1 自由吟味方式
 - 5-2-2 教理統一方式

*1 本稿は『日経広告所報』に2009～10年にかけて連載した『広告の彼岸から』の主に第1～3回の論考を再構成し、加筆修正を施したものである。

- 6. 自由吟味者，英国を活性化しアメリカ新大陸へ
 - 6-1 ポストンは英国ピューリタンの町
 - 6-2 教理統一方式の沼に咲いた自由吟味の花
- 7. 真理観の対照
 - 7-1 教理統一方式の真理観
 - 7-2 自由吟味方式の真理観
 - 7-3 ジェイムズの真理観
- 8. HBS にみる自由吟味土壌の影響
 - 8-1 20世紀前夜のカリフォルニア講演
 - 8-2 HBS の誕生
 - 8-3 教育メソッドはほぼコピー
 - 8-4 設立過程の私的推察

むすび

<参考文献>

はじめに

産業経済研究所創設50周年を祝いたい。その間の足かけ40年にわたって学院経済学部にて働いた私としても、感慨深いものがある。またこの機に、ヘボン先生に感謝の意を表したい。聖書の邦訳を完成されたのが72歳。ご高齢を押してさらにこの白金の台地を入手し、学ぶ者の集いの場を創設しておいてくださったことへの万感の謝意を禁じ得ない。定年退官後の生活では、追想の時間が多くなる。学問的テーマについてもそうだ。今回はその一つを、思い出も交えて随想的に論じたいと思う。

学院における筆者の主要担当科目は流通学（マーケティング学）であった。学会で見聞したところでは、この分野の研究者はほとんどが学部から大学院に、マーケティング専攻のままで進んでいた。そのなかで筆者は若干異色で、学部は経済で経済政策を専攻し、大学院で流通学に転じて流通経済研究者になっていた。

学部でのゼミ指導教授（加藤寛）は、大学院に進んだOBゼミ生を集めて研究の集いを周期的に開いてくれた。恩師生来の温泉好きと、親分肌での振る舞い好きもあって、伊豆での一泊勉強会にも筆者はよくあずかった。勉強会メンバーのほとんどは、卒業するとゼミと同じ経済学専攻で大学院に進学していた。その中で流通・マーケティング学という「商学部的」分野に進んでいた筆者は、研究発表の番が回ってくると、しばしば直截的な言葉での集中砲火を浴びた。私の報告を聞き「マーケティングって、こんなもの学問ですか？」とのたまう。いわゆるリベラルアーツにあたるものがない知識群は学問でないというのだ。恩師までもが多数派の側に立って「君、

これは学問ではないからね。(併行して)他の知識で学問的資質を磨いた方がいいよ」などとのアドバイスをくれたりした。

確かに経済学では、理論の前にその認識方法を論ずる方法論(哲学でいうと認識論)が存在していた。大御所マックス・ウェーバーは、肉厚の方法論を形成していたし、マルクスだって、その経済理論の背景に広大な歴史観(史的唯物論)を展開し、さらにその基盤に独自の認識論(弁証法的唯物論)を形成していた。筆者が飛び込んだ流通学分野にはその種の考察が知識体系の中に存在していなかった。筆者は広い意味でのリベラルアーツにあたる考察なしで、いきなり米国の学者の理論を説明したり、事例を分析したりしてそれを研究報告としていた。そのことが、そのまま経済学で大学院に進んだゼミ同窓生たちからの批判を生んだのだ。それは上から目線の蔑視と嘲笑を含んだもののように、当時の筆者には感じられた。伊豆の温泉宿の夜は、毎度胸苦しい眠りの夜でもあった。

今振り返れば勉強会は、筆者に独特な課題を与えてくれたようにも思える。だが、当時筆者は若かった。悔しさにモチベーションを失って、流通学でのリベラルアーツに当たるものを探索し続けた。それが後の対談集『経済学とマーケティング学の対話』(肥田編著、1979年、ダイヤモンド社)につながった。筆者はそこで、歴史、理論、政策分野にわたって11人の経済学者を選び出し連続対談を試みた。対話を通してマーケティング学はれっきとした学問であると、経済学との関連を示して思い知らせようとした。

といっても、それは副産物的な作品であった。本丸は流通・マーケティング学の認識論に当たる領域の探索にあった。試行錯誤で時間はかかったが、筆者は一定の成果を得た。けれども、それを本にして公表する機会はまだ少なくなっていた。こういう誰も扱ってないテーマの本は、そもそも見込み読者層が狭く、採算面での困難が大きい。加えて出版不況がその後延々と続いた。そんななかで、思索結果の断片を会員制の雑誌に記すこともあったが、筆者の活動可能時間はもはやそう長くはない。そこで、この50周年論文の機会に、懸案のテーマへの探索結果を書き留めておくことにする。多少エッセイ気分で行きたいが、英語 essay は論文を意味することもあるようなので、まあ、いいだろう。

第一部 流通・マーケティング学の認識哲学

考察は本来、20世紀米国に生成したいわゆる「アメリカ学」全般をカバーするものになる^{*2}。だがまずは筆者が専門としてきた流通・マーケティング学に焦点を当て、その分野の諸知識を主たる手がかりにして行うことにする。

*2 社会学、管理会計学、経営組織学などがそれに含まれる。

1. ウィリアム・ジェイムズ

マーケティング学は流通経済学から始まった。19世紀末から20世紀初頭にかけて経済事象の研究に携わる学者たちから、マクロ視野からみた流通の知識体系の構築を試みる者が出たのだ。すると他のものが、この知識を企業の経営実践の視野から加工・再編成して、流通経営論が生まれた。この知識体系はマーケティングと呼ばれた。

マクロの流通経済学では、事例情報が重視された。一般理論は簡素なもので、商品論も耐久性商品・対・腐敗性商品、規格品・対・非規格品、最寄り品・対・買回品といった二類型論が主たるものだった。これらの知識を援用して流通経営論、つまりマーケティング学が造られた。以下、流通経済学とマーケティング学を合わせていう場合は「流通学」ないしは「流通論」の用語を使うことにしよう。

流通論の知識が大学で学問知識として研究されるようになるにつけては、ウィリアム・ジェイムズ（William James, 1842-1910）という人が提唱した認識哲学の後押しによるところが大きい。それはきわめて直接的な基盤としてこの学問を生成させているのであって、結論を先に言えば、流通学には認識方法論はあるのだ。だが、ジェイムズのプラグマティズム哲学は、流通学をする人々の知識体系の中に、これまでのこと「自覚的に」取り込まれていない。その結果、外部者はこの学問を眺めて、「リベラルアーツ領域の知識が空白」という心証を抱くことになってきているのである。

理由の一つは、彼の哲学がとても広範にわたって知識を総合していることにあるだろう。ジェイムズという人は、広告クリエイティブ（表現物）制作活動で言えばプロデューサーのようなキャラクターを持った人ではなかったかと思う。プロデューサーは自らコピーも書かないしアートワーク作業もしないし、挿入音楽も作らない。撮影もしないし映像監督もつとめない。彼個人はこれらのどの才能をも高度には持ち合わせてはいない。だが彼は諸才能を集わせ、組み合わせ総合する能力を持っている。その総合力が作品の品質を決するところは大きい。キャラクターとしてはジェイムズは、そういう色彩が濃厚な人であったように筆者は感じる。

2. パースからの啓発

プラグマティズムなる名称は、「パースの原理」に始まっている。それはパース（Peirce, Charles Sanders, 1839-1914）が述べた知識の価値論を中核にした原理だ。価値論のエッセンスは～「およそ一つの思想の意義を明らかにするには、その思想がいかなる行為を生み出すに適しているかを判定しさえすればよい」～という彼の主張にみられる^{*3}。パースがその思想を自ら

*3 ジェイムズ、ウィリアム著、梶田啓三郎訳（1957）、『プラグマティズム』岩波書店、p.39.

「プラグマティズム」と呼んだことでこの語は出現している^{*4}。

パースはボストンで「アメリカに適合した哲学をつくろう」と呼びかけて、小さな研究グループを開始した。「形而上学クラブ」と称されたこの研究会の末席に、ウィリアム・ジェイムズは座していた。彼はパースの思想に深い感銘を受けた^{*5}。以来20年間それを心に保ち、育成し続け、遂に独自の哲学「ジェイムズのプラグマティズム」を構築したのだった^{*6}。

ジェイムズの仕事は長い期間を要した。それは一つにはパースの思想がジェイムズには抽象度が高すぎたからである。ジェイムズは哲学に、歴史的現実の中で生きる人間に「生きるよすが」となる、“具体的な智慧”を求めていた。だがそれにむけて理論知識を構築していくのは至難の仕事だった。彼はほとんど前進できないままで時を過ごした。

3. ベルグソンからの恩恵～創造的進化と感性主義～

だがあるとき助け手が現れた。フランスの哲学者ベルグソン（Henri-Louis Bergson, 1859 - 1941）である。「實在の本質は創造性・個性性である」という骨子をもった独特の存在観にジェイムズは目を開かれた。ジェイムズはそれをそっくりそのまま援用して、自らの志向していた領域を自覚的に定式化・知識化するための、第一歩を踏み出していった。

3-1 欧州の存在論～法則主義～

ベルグソンの存在論は、彼の時代の欧州の主流の対極に立つものだった。当時欧州存在観の大勢は、「實在の本質はその中に秘められた法則にある」としていた。この思想は「この世の實在は、絶対的法則に則って展開していて、實在のあり方はそれが秘めている法則を知ることによって認識できる」とするものだ。そこには～實在の真の認識は本質を知ることによってのみ可能であり、その本質は法則であって、法則的知識が真の知識であり、真理となる～そういう考え方があった。これには中世カトリック神学の影響が大きい。がともあれ、この考えで行くと、人が直接観察するような多様な事例は、本質の表面的な現れである「現象」にすぎないことになる。

カール・マルクスはこの見解を積極的に踏まえて、大衆の琴線を震わせる経済理論を造り上げた。物理学者ニュートンの、物質のもつ力に関する画期的発見は、そうした存在観を強化した。彼は「物体に内包されているエネルギー」を発見し、それを「重力（引力）と磁力だ」としたのだが、それらは「神（創造神、英語ではゴッド）が創造した被造物のなかの膨大な法則の中のほんの一部」であって、自分はそれを発見したにすぎないのだ、と考えていた。

*4 プラグマティズム自体はパースの造語だが、語源的にはギリシャ語の「プラグマ」（意味は「行動」であり、英語のプラクティス、プラクティカル、もそこから派生している）に由来するという。

*5 ジェイムズ、ウィリアム著、榎田啓三郎訳（1957）、前掲書、p.40。

*6 ジェイムズの「プラグマティズム」思想があまりに有名になったため、その語の創唱者パースは自分が提唱した本来の意味を明示するために、それをプラグマティシズムと改名せざるを得なくなった。それもあって今日プラグマティズムといえばジェイムズのそれを指すようになっていく。

3-2 法則主義と対極の存在論

ベルグソンは、時の欧州で大勢だった存在観の対極に立っていた。彼は実在とは、その深奥に妙なる法則が宿るといようなそんな神秘的なものではなく、われわれが直接観察するサブスタンスとかけ離れたものではない、と考えていた。そしてその本質は創造性・個別性にあって、実在（存在）は、常に動いていて新しい展開をする、という。ベルグソンはそれを創造的進化といった。たとえばわれわれの観察できるところで言うと、肉体の一部である自分の「手」は日々刻々と老化している。つまり、常時動いている。言い換えれば一瞬前の手（実在）に無かった新しいもの、個性的なものが、一瞬後のその手（実在）には生じている。これがベルグソンの実在のイメージだった。

3-3 実在認識は感性で可能

その上でベルグソンは、動的である実在そのものを人間が認識できる方法は法則認識とは別の感性認識にある、と考えた。彼は、本来創造的で個別的な実在をそのまま認識する方法として、理性でなく感性という認識能力を持ち出すのだ。感性は人の意識を対象実在と共鳴、共感させ同一化させる力を持っている、と彼はいう。これを用いて対象と精神的に一つになり、一体化すれば実在そのものは感性に認識される、と考える。たとえば人物 A そのものを認識するには、A と同一化して A になってしまうのだ。そうすれば A という実在そのものが認識できるという。

実際に対象への同一化を成功させるには、その対象を自らの意識の内に住まわせて一定時間瞑想（黙想）することも必要だ。そういう時間を持つと自分は A になることができ、個性も含めた A という実在の認識は可能になる、と考える。こうすると禅問答を連想する人が日本人には少なくないだろうが、それでいい。実際ベルグソンの認識論には、禅寺での説教に似たところが少なからず含まれている。

3-4 概念認識はアバウトな認識

ベルグソンの考え方では、実在を我々の理性（筋道立てて認識する能力）が認識する作業には、その正確さにおいて自ずと限界が生じることになる。なぜなら理性は概念（concept）を用いて認識をする。その概念に信号を付けたものが「言葉」だ。理論も言葉を組み合わせただけだから、基本的に概念で出来ている。ちなみに、日本語の「概」とはおおむね、だいたい、という意味だ。「念」は比較的深い、エネルギーを込めた思い、という意味である。そこで、概念とは「おおむねの（深い）思い」となる。よくできた日本語だと思う。

がともあれその概念は実在の個性的なところを無視すること、捨象することによって出来ている。たとえば我々が石という概念でそれにカバーされる実在を認識する時、どうするかをみればわかる。われわれはこの時、石なる概念に収納されるべき個々の実在が持っている個性は無視する。共通面だけ持ったイメージ体を意識に浮かべている。「土が小さく固くまとまったもので、岩ほど大きくなく、土ほど小粒でない」といったごとくである。概念とはこうした属性を持つ

た抽象的イメージ体だ。このイメージ体にすべての実在を収納するのが概念認識だ。個別性を実在の本質とするならば、それはかなりアバウトで大ざっぱな認識行為ということになる。

理論とは、そういう概念を人が頭の中で組み合わせて造る思想体だ。だから概念の持つアバウトさを限界としてもつことになる。ベルグソンのその考え方は、当時の欧州哲学の主流と対極に立っていた。

3-5 ウェーバーの「するどい概念構成」を補填

だがベルグソンは概念、理論を無視はしない。実在認識は科学のためにも必要だからだ。感性受信の内容そのものは、紙などに記録することも出来ず、他者と交信することもできない。記録し交信するには、それをシンボル（代替認知物）に置き換えねばならないのだ。その代表が概念であり、言葉であり理論だ。

そこで彼は、感性認識した実在と概念との近似性を考える。この概念認識を実在に近似的にすることが科学認識の精度を決めるとベルグソンは考えた。そしてそのためには実在を感性認識した内容にできるだけ合致するように概念を構成しなければならない、とする。

ちなみにこれに関しては、マックス・ウェーバーがとても上手い言葉で表現している。「するどい概念構成」というのがそれだ。実のところ彼は感性認識の構造を考察する認識哲学は手がけていない。「理解の歴史学」の旗手だった彼は、歴史科学には実在をシャープに描き出す概念を作成する努力が必要、と直感的に言っているにすぎないのだが、「するどい概念構成」などと上手い言葉で言われると、われわれはそれがあたかも自明であるかのような錯覚にとらわれる。實際上彼の所論にある認識論的空白を、ベルグソンの認識論はそっくりそのまま埋め合わせてあげている光景になっている^{*7}。

4. ジェイムズの「プラグマティズム的」展開

ジェイムズは、以上のベルグソン哲学を、まずそのまま受容した。ジェイムズというのは素直そのものな人であって、10歳近く年下だったベルグソンを「我が師」として手放しで尊敬し、その知的成果をいただいている。「ベルグソン哲学に出会わなかったら、今の自分の哲学はない」との旨まで告白している。

その上で、彼はベルグソン哲学に手を加えていく。これについては若干の背景認識がいる。欧州での科学の姿勢はニュートン物理学（力学）に土台づけられていた。それは対象としての物資に距離を置いて探求し、そのうちに内在する法則を発見するのをゴールとする。科学者の主目的は「発見」にあり、人々には「その知識を自由に用いてください」という姿勢だった。

*7 ウェーバー、マックス著、出口勇蔵訳（1962）、「社会科学および社会政策の認識の『客観性』」『ウェーバーの思想（世界大思想全集18）』、河出書房新社、p.118。

4-1 事例的知識と法則的知識に価値の上下なし

だがジェイムズはすべての知識の主眼を、生きる個々人の実践生活に役立つものとするに置いていた。彼はその姿勢に立って、欧州で崇拜されている「法則知識が特別」だという考えを乗り越えてしまう。その際、彼はまずベルグソンの概念認識による知識を法則的知識と事例的知識との二つに分けるのだ。彼の法則的知識は、複数の個別事例に当てはまる一般論的知識であって、欧州で考えられていたような「ものの本質を貫き通す法則」ではない。その意味で法則「的」知識なのだが、彼はその知識の価値（役割）を「個々バラバラな事例知識の関連を理解させ、それらを統一的に認識させるところにある」といつている。その一方で彼は、事例的知識にも「現実の種々相に明るくする」という実用価値を積極的に認める。その上で彼は「両者の知識に価値の上下はない」としたのだ。

彼の言葉ではこうなる～

「われわれの知性が真に目指すものは、多様性でもなければ統一性だけでもなく、**全体性**である。この全体性にあつては現実の種々相にあかるいということがその関連を理解することと同様に重要なのである」*8。

全体性の意味内容については後述する。とにかくこのようにして「法則的知識と事例的知識とに価値の優劣はない」と言えるのは、ベルグソンの概念論を学んでのことである。つまり、ベルグソンによれば事例知識だろうが法則知識だろうがどちらも概念知識に過ぎないのだ。万有引力の法則も、概念（言葉）を用いて表現されているが故に、実在そのものを把握させるものではない。どちらも実在そのものに対してはアバウトな認識でしかない、ということになる。だからその間に価値の上下はなく、どちらも固有に実用機能を持つ、といえるのだ。

ベルグソンは欧州科学ではまったく顧みられていなかった感性認識に実在把握の鍵を与えた。そしてその哲学は欧州のカトリックベース認識哲学の桎梏から～敢えて言えば呪いから～ジェイムズを解放した。欧州流では、法則が発見されたらそれは実在の本質を全て明かしてしまう。現象的なことはみなそれから演繹されてしまう。……ベルグソンはこういう欧州風の固定観念からジェイムズを解き放ったのだ。

4-2 パースペクティブ

4-2-1 全体を一度に思わせるもの

ジェイムズは思考をすすめる。彼は事例知識と法則的知識の上に、もう一つパースペクティブという概念を持ってくる。これは日本語では鳥瞰図、世界観、全体観、全体像などが対応する。

その意味と有用性の理解には、具体例を照応させるのがいい。米国での経営教育の草分けは、

*8 ジェイムズ、ウィリアム著、梶田啓三郎訳（1957）、前掲書、p.98.

後述するハーバードビジネススクール（HBS）であり、マーケティング・マネジメント知識でもここは先駆的である。この分野を戦後ひきいていたボーデン教授は、マーケティング活動要素を整理した表を作成して、学生に配布していた（〈表1〉を参照）。それは活動要素を手段と環境要素に大別し、そのなかに示した諸手段、諸環境に、個別的な事例知識を収納できるように工夫されていた。

あるとき、他大学で教鞭をとっていたハワードが、その要素を簡略化したような一枚の図（〈図1〉参照）を発表した。これが大反響を生み、彼は一躍マーケティング論の有名人となった。対照的にボーデンリストはこれにオーバーシャドウされた観となった。

この図が、ジェームズのいうパースペクティブ・鳥瞰図にあたる。これはマーケティング・マネジメント活動の全体を「一度に思えるように」している。世間はこの図を高く評価し、歓迎した。「全体を一目で見る」機能に独自の実践価値を感知したからである。これがパースペクティブの持つ実践価値を例示している。

余談だが、冒頭に記したように筆者は大学院から流通・マーケティング学に専攻を変えたので、学部とは別にもう一人恩師（片岡一郎）が院生時代にいる。師は、ボーデン教授の教えを戦後いち早くHBSで受け、個人的にも親しかった。あるとき筆者は「ハワードってボーデン先生のリストを簡略化して図にただけではないでしょうか。でもそれをまったく注記していませんね」と恩師に問いかけたことがある。師は「まあ、パクったんだな。でも、そんなこと言えんわなあ」と軽快に笑った。

実際、ボーデンは作成した表を2～3枚のA4用紙コピーでもって受講学生に配布し続けていた。HBSの配布物情報は速やかに全国的に拡散する。だからそれはハワードの手にも容易に入る。彼はボーデンの作った表を簡素化し、一枚の絵で示したのかもしれない。そのあたりは確言はできないがともあれ、ハワードは表舞台の寵児となり、ボーデンリストはオーバーシャドウされた。そのことが「全体を一度に思える」鳥瞰図のもつ独自の実践価値を例示してくれているように思われるのだ。

〈表1〉 ボーデンのマーケティング要素表*9

＝環境要素＝

- (1) 消費者の態度と習慣 (Consumer Attitudes and Habits)
- (2) 販売業者の態度と方法 (Trade Attitudes and Methods)
- (3) 競争 (Competition)
- (4) 政府規制 (Governmental Controls)

*9 HBSで配布されたボーデンのマーケティング要素の邦訳は肥田日出生（2007）、『マーケティングミックスの論理』、中央経済社、pp.93-95、に記されている。上記本文の要素表はそれを簡素化して示したもの。

＝手段要素＝

- (1) 製品 (Merchandising -- Product Planning)
- (2) 価格 (Pricing)
- (3) ブランディング (Branding)
- (4) チャンネル (Channel of Distribution)
- (5) 営業 (Personal Selling)
- (6) 広告 (Advertising)
- (7) セールスポモーション (Promotion)
- (8) パッケージング (Packaging)
- (9) ディスプレイ (Display)
- (10) サービス (Servicing)
- (11) 物流 (Physical Handling -- Warehousing -- Transportation -- Inventory Policy)
- (12) 市場調査 (Fact Finding and Analysis -- Marketing Research)

<図1> ハワードのマーケティング図式, 1963^{*10}



*10 Howard, John A. (1963), Marketing Management—Analysis and Planning (Revised Edition) Richard D. Irwin Inc. より作成。

4-2-2 意味と価値を分与する

パースペクティブ（全体観）の役割をいまして追加すると、一つには構成要素に意味を与えることが挙げられる。たとえば、自分にとってその家族（山田家としよう）も、小さいながらも自分を含む全体観の一つである。人はこのパースペクティブを意識することによって、自分は山田家の人間、という意味を感じられる。通常言うところの意味づけ、意義づけがそれである。

もう一つは、構成要素に価値意識を与えることである。人は家族を価値あるもの、大切なものと思っていると、その価値意識は構成員である自分にも感じられるようになる。自分は大切な山田家の一員だから大切だ、価値ある、となる。これは価値分与機能ともいえるかもしれない。

ちなみにこの価値分与機能には、注意すべき面もある。全体像が民族国家になり、これにつよい価値を認めると、国民は自分をその価値ある国家の一員であるからと、異常に大きな価値意識を抱くことがある。こうした心理は全体主義や民族差別主義を生む要因にもなりうるので注意を要するのだ。

がともあれ、全体像はこのようにして、自らの価値を構成要素に分与する機能をもつ。そして価値意識は意志決定に不可欠な要素であるから、価値分与機能もまた、日々実践して生きていく人間にとって重要な一機能ということになる。ジェイムズはそれを必ずしも具体的に言うてはいないが、示唆はよみとれる。彼の次の言葉は、パースペクティブの持つこれらの機能をまとめて言っていると思われる^{*11}。～

「われわれが実在について語ることは、われわれが実在を投げ込むパースペクティブのいかに依存している」

4-2-3 パースペクティブは層をなす

パースペクティブについても一つ留意しておくべきことがある。それは全体観であり、そういうビジョンはどんどんと広範囲なものへと展開されうる。たとえばマーケティング諸活動を含む全体像はハワード図式だけではない。金融財務管理、労務管理、原料購買などを含んだ全般的な経営活動も鳥瞰図になり得る。さらに上空に飛翔すれば自国の政治経済像、さらには世界経済像も全体像になり得る。

また五感経験の領域を超えた形而上学的ワールドも全体観となってそれを含みうるだろう。ジェイムズはこの広大なパースペクティブを「宇宙観」という語で表現している。実際、米国人の意識には、聖書の供給する形而上的世界観が有意に働いていることが少なくない。そこでは世界は「万物の創造神（GOD）」によって創られた被造界であり、究極的には創造神によって運営・統治されている。そういう全体観～ジェイムズの言葉を借りれば宇宙観～が、生きて実践する人間にとって、価値あるパースペクティブとして働くことも大いにありうるのだ。

*11 ジェイムズ・ウィリアム著、榎田啓三郎訳、前掲書、p.180.

第 2 部 アメリカ経営学のリベラルアーツ

筆者の考察してきた認識哲学は、すでに流通・マーケティング学を超えた対象範囲をカバーするものとなってきている。ここで対象を米国経営学全般に拡大し、その認識哲学をさぐってみよう。そのための具体的な手がかり素材としてハーバードビジネススクール（HBS）に焦点を当てる。ここは流通学のみならず、管理会計学、経営金融学、経営組織学、労務管理学などの研究の草分けであり、今も多くの分野で先端を走っている。また教育メソッドにおいても代表的なものを持っている。それ故アメリカ経営学の認識哲学考察の手がかりとして、このスクールはベストな素材と思えるのだ。

5. 自由吟味方式と教理統一方式

5 - 1 ジェイムズ哲学の要約

まずジェイムズの「実生活に有用な認識方法」を筆者流にまとめてみると、次のようになる～。

1. 事実の事例的知識を収集する。
2. それらを法則的知識で体系化する。
3. 諸知識を一目で見渡すパースペクティブ・鳥瞰図を作成する。
4. その全体像の中に事実を位置づけ、得られる意義と価値を認識して実践する。

命題にまとめてしまうとこんなにも単純で常識的なものになるジェイムズ認識論だが、そのもとには深い思想土壌が横たわっている。具体的にはそれは、聖句自由吟味方式とでもいうべきキリスト教活動の原初的方式が形成する意識土壌である。

こういって学問に宗教の話を入れるということで、違和感を抱く人も多いだろう。だがその反面、日本では「西欧文明を知るにはキリスト教を知ることが不可欠」との言が繰り返し発せられてきた。なのにその面からの説明がなかった理由は、いざとなると宗教の話だと躊躇されてきたことだけではない。むしろキリスト教の実体を認識する力が識者になかったことが大きい。だが筆者はその探究を続け、その土壌を把握するに至っている。にもかかわらず筆者は実のところ、この説明をこれまで見送ってきた。それを説明するために必要なキリスト教知識があまりに多く、説明が膨大になってしまうからであった。だが、このほどその知識を効率的に供給する本が出版された。『バプテスト自由吟味者』^{*12}がそれである。この書物の助けで、筆者は以下にそれを論じることができる。

*12 フランク・S・ミード著、鹿嶋春平太訳・解説、『バプテスト自由吟味者』、2017年、編集工房 DEP。

5-2 キリスト教には二つの活動方式がある

そもそもから始める。現在われわれは、キリスト教活動というと礼拝儀式的な風景を連想する。教会に集まって賛美歌を歌い、説教を聞き、献金して帰宅する。これを日曜毎に繰り返す……そういう姿だ。だがこれは儀式化した活動であり、後発のキリスト教団が用いた方式である。これを追っていたのではいつまでたってもキリスト教活動の本質は認識できない。本質はキリスト教会を始めた本家本元が行った活動にある。上掲書物が示しているように、それは（聖句）自由吟味方式とでもいうべきやりかたでの活動であった。

5-2-1 自由吟味方式

初代教会と呼ばれる史上初のキリスト教会は、その方式で活動した。ここではイエスの直接の弟子たちが、個々の教会員に聖句（聖書の中の個々の言葉）を自由に吟味・解釈させた。彼らに数人の小グループを結成させ、リーダーを一人選ばせた。個々人はそのどれかに属し、自分のグループに自らの解説を持ち寄って、自由に議論し吟味しあった。礼拝もそのグループで行った（これは後年「家の教会」と呼ばれるようになる）。前掲書物はこのやり方を聖句自由吟味方式～略して自由吟味方式～と呼んでいる。筆者もその語を用いる。

初代教会は、紀元後35年頃に開始された。以後100年余にわたって、キリスト教活動はこの方式のみで行われている。それでもって教会は、破竹の成長をした。発足して30年がたつ頃には、信徒の集まりがローマ帝国全土に散在するほどになった。こんな発展を実現した宗教活動は人類史に希である。

5-2-2 教理統一方式

新しい宗教活動には当初外部者は恐怖を抱くものだが、100年余にわたって初代教会が存続するとキリスト教会への恐怖感は減少した。教会は当初から信徒に社会経済的利得をも与えてきたこともあって、多数の大衆の信徒が参入してきた。彼らは聖句吟味をする素養を持たなかったのので、担当指導者は代わりに一つの解釈体系を正しいものとして与えることになった。参入者は増加の一途をたどり、これが教会化し、信徒が聖句を吟味しない方式の教会が出現することになった。紀元後2世紀後半のことである。

新教会では教団本部の高僧たちが合意した聖書解釈を唯一正統な教理と定めて、これを信徒に与えて運営した。このやり方を前掲書では、教理統一方式と呼んでいる。筆者もそれに従う。教理とは解釈の別名である。

この方式のもとで信徒は加速度的に増大し、新教会は大規模教団となった。これが後のカトリック教会である。カトリックは後発教会なのだ。この教団は紆余曲折を経てAD392年にローマ帝国の国教となった。こうして国家の文部宗教省のような立場を得た教団は、個々人が聖句を自由に吟味する教会を吸収併合しようとした。だが、自由吟味者は要求を受容せず、結局、カトリック教団は国家権力（裁判権や軍隊）を用いて居住地を襲って彼らを逮捕し火刑に処した。使

用文書も没収焼却した。この状態が、欧州中世において実に5世紀から16世紀までの1200年間にわたって続いた。

国教となった教会は公式の歴史記述権を手中にしている。彼らは自由吟味方式の活動を歴史に記録するに値しないものとして扱い、自由吟味者が一切登場しない歴史を書き続けた。こういう歴史説明が1200年も続くと、それが歴史の常識となる。かくして自由吟味方式のキリスト教活動はキリスト教史には存在しないという通念が固定した。その常識は今日にも続いている。

だが実のところ自由吟味者は膨大な数で存在し続けてきた。現在その精神的・霊的子孫は多く米国に集積している。そのひとつは、南部のバイブルベルトと通称される広大な地域だ。彼らは「サザンバプテスト」と呼ばれていて、紀元後2000年時点での成人メンバー数は4千万人と推定されている。もう一つ多数なのは、メノナイト自由吟味者である。彼らは米国北西部のカナダと国教を接する、これも広大な地域に集積している。州で言うと、オレゴン、ワシントン、ノースダコタ、サウスダコタ州だ。これら人々は生涯聖句の自由吟味をし続けている。だからわれわれは初代教会の活動状態を、生きた資料として彼らにみるができるのだ^{*13}。自由吟味方式、教理統一方式ともに今の歴史教科書には出てこない用語である。聞きなれない言葉になるのだが、できるだけかみ砕いて説明してみる。ここで自由吟味者の歴史を見よう。

6. 自由吟味者、英国を活性化しアメリカ新大陸へ

初代教会方式の自由吟味者たちは、欧州大陸でカトリック教団に激しい弾圧を受けながら、代々活動を続けた。アルプス、ピレネー、スイスの山中に隠れ住み、また、当時僻地だった北欧地帯に逃れ住んだ。そして16世紀にそれまでイギリスにて国教だったカトリック教会を国王ヘンリー8世が追放し、英国国教会を造ると、自由吟味者は欧州大陸から英国に（密かに）大量流入した。英国人は彼らの活動状態をみて強烈に覚醒された。知性と精神は爆発的に活性化し、七つの海を支配する大繁栄時代を実現した。その後17世紀に自由吟味者たちの大半は、アメリカ新大陸に（これもまた密かに）移住した。

大陸植民地での自由吟味者～とりわけバプテスト自由吟味者たち～は植民地に聖書の自由吟味活動が政治権力に抑圧されずにできる国家の構築を志した。ロジャー・ウィリアムズ（1603－1683）が今のロードアイランド州のある一地点にプロビンスという自由吟味タウンを築くと、直ちにそこを拠点にて隣接するボストンの地に進出し、そこに自由吟味教会を作り始めた。（これでハーバード大学の地、ボストンが考察できるようになった）

*13 バプテストもメノナイトも、公式の常識的な教派分類では、プロテスタントのなかに収納されている。だがその常識は大間違いで、彼らはプロテスタントではない。この名称はカトリック教団が「彼らは「抗議～プロテスト～する連中」の呼んだことに由来する。宗教改革の旗手、ルターやカルバンはカトリック教会の方式から教皇をなくそうとしただけで、教理統一方式はそのまま継承している。プロテスタントは自由吟味教会とは真逆な性格の教派なのである。

6-1 ポストンは英国ピューリタンの町

当時ポストンは英国から移住していた清教徒（ピューリタン）が圧倒的多数者として支配する町であった。英国ピューリタンは米国の自由精神の先駆者のように教科書に書かれているが、事実は全く別で、厳格な教理統一主義者だった^{*14}（本稿では以下、英国ピューリタンをピューリタンと略称する）。自由吟味者はポストンの町に、ねじ釘をねじ込むように自らの活動方式の教会を作り始めた。ピューリタンは彼らの逮捕、広場でのむち打ち、投獄などで応じた。だが自由吟味者は迫害を受けながらもやめなかった。ついにポストン市民が流血のむち打ち場面に食傷し、彼らは黙認されるようになった。

6-2 教理統一方式の沼に咲いた自由吟味の花

ハーバードは、こういうポストンのケンブリッジという地に1636年頃に作られた私塾のような学校だった。そこに1640年、神学校、ハーバードカレッジが開始されている。それが実質上、自由吟味活動の盛んな神学校だったらしいことは、次の事件からも推定される。初代学長ヘンリー・ダンスター（1609-1659：在位1640-1654）は、誕生した自分の子を幼児洗礼せよ、とのポストン政府の命令を拒否して、裁判にかけられている。幼児洗礼は教理統一方式の教会が共通してとる制度だが、自由吟味者はこれを聖句に反するとして行わないのだ。彼は有罪宣告され、州議会から訓戒を受け、大学のあるケンブリッジ地区を追放された。事態のさらなる悪化は必定だったが、早すぎる死が彼を襲い、それによって彼は、かろうじてその被害にあわずにすんだ。上記書物はそういう事件も記録している。

こうした事件から、ハーバードはピューリタン一色の沼の中に咲いた、自由吟味活動の一輪の蓮の花のような学校だったと推察される。ジェイムズはこういうスペシャルな伝統を持った思想空間（キャンパス）に、後年19世紀に身を置き学究活動を続けたのである。彼の時代には自由吟味思想は米国全土で無自覚なる意識土壌になっていた。

7. 真理観の対照

7-1 教理統一方式の真理観

ジェイムズの思想と自由吟味思想との関連をみるために、自由吟味者の持つ認識哲学をみよう。これは教理統一方式と対比するとわかりやすいので、まずこの方式の真理観をみる。

聖書の中の言葉（聖句）には、目に見える経験界から目に見えない形而上世界にわたって、個

*14 ピューリタンの名は本来は、欧州大陸の聖句自由吟味者につけられたニックネームの一つだった。そのことも前掲書は記している。英国では自由吟味者の活動に啓発されて、英国国教会の改革運動をした司祭たちとそのフォロワーをがピューリタンと呼ばれた。だが彼ら自由吟味者になるところまでは行かれず、その反動で逆に厳格な教理主義者となった。これを知ると、後年ピルグリムファーザーズの名を与えられる英国分離派ピューリタンが米国自由精神の祖というのは、噴飯物の作り話であることもわかってくる。

別的事実情報がふんだんに含まれている。なかでも旧約聖書には、「万物の創造神」だと自称する存在が超靈感者（これを預言者という）に見せた幻を、超靈感者が創造神からのメッセージだと「信じて」受信し、言葉で記録した事実情報が多い。

そうした聖句の間の繋がりを見出してつくる論理体系が教理（平たく言えば、解釈）であるが、論理体系というのは同じ聖句群からも複数見出しうる。教理統一方式の教会ではそのなかで、教団幹部が作成した教理を唯一正統とし、これに最高の権威を認めて教会を統一的に運営していく。そしてその正統とされた解釈を真理とする。だから、教理統一方式では文字通り「真理は一つ」となる。

7-2 自由吟味方式の真理観

自由吟味方式での真理観は全く別だ。彼らは教理（解釈）ではなく、解読される前の「聖句そのもの」に最高の権威をおく。その上でその解釈を個人の自由とする。さすれば解釈が個人によって分かれるのだが、それでよしとする。外部者から投げかけられる「究極的な唯一の真理の存在を認めないのか？」という疑問には、彼らは「それが存在することは否定しないが、そういうものが人間個々人の短い生涯で見出されることはありそうにない」と応える。「では真理なしでやるのか」というと、彼らは「膨大な内容を持つ聖句に対し、個人々が吟味を試み解読したものがその人にとっての（その時点での）真理だ」と応じるのである^{*15}。

つまり「真理は一つ」ではなく「個人々が各々持つもの」なのだ。のみならず、教理統一方式での真理が、究極的に到達した「静態的なもの」であるのに対し、自由吟味者は、真理は個人々の中で成長する「動態的なもの」とする。そして「そんな相対的なものは真理と言えない」という批判には、「有限な人生を日々生きる現実の人間個人々にとって、それ以上に確信して頼れる真理（真の知識）が他にあると思えない」と応じる。

7-3 ジェイムズの真理観

この真理観にジェイムズの真理観を並べてみよう。そのエッセンスを彼は次のように述べている^{*16}。

「真の観念とはわれわれが同化し、効力あらしめ、確認しそして検証することのできる観念である」

ここで「真の観念」とは真理のことである。「われわれ」とは「人間個人々」ということである。つまりジェイムズは「真理というのは、当人個人々が生きる中で、同化し、効力あらしめ、

*15 筆者の米国サザンバプテスト地域での面談調査による。

*16 ジェイムズ、ウィリアム著、榎田啓三郎訳、前掲書、p.147。

*17 ジェイムズは、こうもいっている「ひとつの観念の真理とは、その観念に内属する動かぬ性質などではない。真理は観念に起こってくるのである。それは真となるのである。出来事によって真とされるのである」ジェイムズ、ウィリアム著、榎田啓三郎訳、前掲書、p.147。

確認し、検証できる知識だ」といっているのである^{*17}。この知識観、真理観は上記自由吟味者のものと同質な、端的にはほとんど言い換えとも言えそうなものだ。だがこの類似は浅薄な援用とか、ましてや剽窃などによってもたらされたものではないだろう。それは自由吟味土壌から湧き上がる意識波動の中で生きて思索したジェイムズに結実したものにちがいないのだ。

8. HBS にみる自由吟味土壌の影響

8-1 20世紀前夜のカリフォルニア講演

ハーバードビジネススクール（HBS：創立1908年）は、ジェイムズ哲学と自由吟味土壌との密接な繋がりを絵のように見せてくれる舞台空間でもある。

1898年8月26日、ジェイムズはカリフォルニア大学で自らの哲学を講演した。爆発的反響が起こり、その所論は燎原の火となって全米に広がり、一気に米国の主流思想になったという。これを日本の識者は通常「アメリカではすべからず思想の伝播が早い」と説明するが、事態はそう単純ではない。たとえばマルクス思想は米国では、いわゆる東海岸アイビーリーグ的なインテリ層だけにしか伝播しなかった。思想の伝播の速度と範囲は、その地その国の思想土壌との適合性によって決まるのである。

独立戦争での勝利を契機に、米国では自由吟味者の増大は加速度的になっていた。その結果、自由吟味主義は全国的な思想土壌となっていく。ちなみに、この種の波及は現在も続いている。サザンバプテストはそれを「バプテストタイゼーション (Baptestization)」という独自造語で語り合っている。これは「バプテスト化」といった漠然とした意味の造語で、他派の教会が、活動の中に自由吟味教会の制度を取り入れたりする事象もそのひとつだ。筆者のバイブルベルト滞在中にも、聖公会教会（かつての英国国教会）がバプテスト教会のスマールグループ制を取り入れて大量の信徒の参入を得た、との情報が流れていた。かくのごとくに自由吟味思想は意識土壌となって今も浸透拡大している。なお、バプテストタイゼーションにはもっと身近な例がある。米国では人々がその社会的地位などにかかわらずファーストネームで呼び合う。この行動様式は、自由吟味方式におけるスマールグループ活動でのそれが全米に波及したものなのだ。

話を戻す。独立戦争での勝利の百余年後、ジェイムズ講演はこの土壌にマッチで火をつけた。炎は全米の各地で燃え上がった。それはまた、全国の大学での「知」にも点火し、そのいくつかで流通学もこの時期に産声を上げ発展を開始しているのである。

8-2 HBSの誕生

彼の講演の約10年後に HBS は誕生している。現代この MBA 経営大学院は世界で最も高名な経営教育の場ということになっている。「一体どんな教育を受けられるか」と胸を膨らませて世界各国から若者が修士課程に入学してくる。だがそこで、2年間にわたってなされるのは、ほとんど、ケースと称される事例小冊子の個人研究と、それをめぐってのグループ討議とクラス討議

だけである。こんな大学院など「個別的事例知識が人を現実の諸事象に明るくする」を初めとする知識の価値論の支えなくしてアカデミーの場に成立することはない。ジェイムズ講演の熱気は彼の本拠地ハーバードにも飛び火し、彼の認識哲学がこの教育機関を発想させたのだ。

8-3 教育メソッドはほぼコピー

この経営大学院の教育方法は自由吟味教会での活動方法と酷似している。まず前述した自由吟味教会での活動方法を再論すると、そこでは教会員個々人はまず聖句（それは個別的歴史事実を多く含んでいる）を「個人研究」する。その後、自分の解読を自ら属する数人のスモールグループに持ちよって、「グループ吟味」する。その際、グループリーダーは会としての結論を出さない。そして最後に全員が教会堂に集まって礼拝し、牧師の説教を中心にした礼拝をする。牧師は有給で聖句吟味に多くの時間を割けるので、教会員は尊重して耳を傾ける。だが「それが唯一の正解」という姿勢を牧師は決してとらない。教会員も説教をつまるところは一つの解釈として受け取り、自由に吟味する。こういうサイクルの活動を自由吟味教会では毎週繰り返す。

一方HBSはどうかというと、学生は企業の経営事例を記した小冊子（これを「ケース」という）をまず「個人研究」する。次に「小グループ討議」をし、最後にクラスに集合して教授のリードのもとに「クラス討議」をする。……このプロセスを毎週繰り返す。

初めて聞く人はその同一性に驚くだろう。パクリというのはあまり上品な言葉でないからやめるべきかも知れない。だが、クラス討議での原則「教師は結論めいたことを言わないでクラスを閉じる」を知ると、これはもう自由吟味方式のコピーと判断するしかないだろう。そしてその同一性は、自由吟味の意識土壌から湧き上がる波動が自然に形成したものとも言えるものなのである。

8-4 設立過程の私的推察

ジェイムズ哲学と自由吟味方式の意識土壌とは、糾わる縄のごとくにHBSを編み上げている観があるのだ。そしてそれを踏まえると、その設立のプロセスを筆者は容易に推察することができる。蛇足ではあるが最後に筆者のそれを付け加えておく。

ハーバードでは、まず、ジェイムズの言う個別的事例的情報を現実の企業経営活動のなかで得ようとした（それは聖書のなかに記されている個別事例情報に相当する）。そのため若い研究者（彼らはケースライターと呼ばれるようになる）をやとって企業に出向させた。経営事例の聞き込みをさせ、文書資料も入手させて、事例小冊子を数多く蓄積することに着手した。ケース冊子はマーケティングだけでなく、管理会計、経営組織、労務管理など全ての経営事象に関して作成させる。これをたくさん学生に読ませよう。さすればジェイムズの言うように、学生は経営の「個別事実に明るくなる」だろうと。

だがこれを読ませるだけでは芸がない。読んだ後教室に集めて教授が模範解答を講義する。……これでもものたりない。なにか今ひとつ知恵を深く身につけさせる方法はないか。……ここで自由吟味教会の聖句吟味活動がごく自然に浮上した。自由吟味キリスト教会の活動体験を持つ教

師が少なからずいたのかもしれない。こうしてスモールグループ方式が取り入れられ、「グループ討議」が挿入された。そこでは自由吟味教会と同じくリーダーは結論を出さない。会を閉じる際に「結論めいたこともいわない」。次にその原理を、教授がリードするクラスディスカッションに取り入れた。クラスを閉じるに当たり、「教授は結論めいたことを言わない」との原則を付け加えた。こうしてこの方式にケースメソッドという名がつけられた^{*18}。経営大学院、HBSの誕生プロセスを筆者はかく推察する。

むすび

ジェイムズ認識論は自由吟味方式の意識土壌とのつながりで示されると、俄然明確化する。さらにその特質はHBS教育という舞台にのせてみると最も明確に具現する。

スクールではその教育法をケースメソッドとして、いわゆるケーススタディとは一線を画するものという。ケーススタディでは事例を調べてその領域での知識体系をうる。だがケースメソッドでは、三ステップの学習活動によって、知識を超えた実践の知恵が身につく、とするのだ。

ただしその際、ジェイムズ哲学におけるパースペクティブの作成は直接教育課題としない。世界観には個々人の価値判断が関与するからである。価値判断はウェーバーのいうようにつまるところ個々人の主観に基づく。そういう性格をもった要素を事実に関する客観的な議論に混入させるべきでない。そこでスクールでは「知識は教えられるが、知恵は個々人が自らの心の中で育成するしかない」という。知恵とは知識に価値の重み付けを加えたものをいう。そこまではスクールでは教えないというのだ。そのことをHBSでは“Wisdom cannot be taught”という短いフレーズで示唆している。

このメソッドの教育効果については、スクールが語ることのない傍証がある。自由吟味教会での活動方式が歴史の中で成し遂げてきた成果がそれである。この方式は人間の精神と知性を激しく活性化して、英国を七つの海を支配する大帝國にした。アメリカ植民地では自由吟味者は母国との独立戦争を入念に仕掛け、勝利をもたらし、新國家を建設した。そしてそこに憲法を成立させ、そのなかに政教分離と信教自由の大原則を挿入させ、人類史に初の言論自由國家を造り上げた。前掲書『バプテスト自由吟味者』はその事実を歴史的に示している。

聖句自由吟味活動はこうした活性効果を持つのだ。その意識土壌の上に、ジェイムズの認識哲学は構築されているのだ。そしてそれはアメリカ経営学だけでなく、社会学など20世紀に生成したすべてのアメリカ学を支えるリベラルアーツになっている。

……筆者はこうした研究報告を、かつてのゼミOB合宿でしている風景を夢見る。いまや当時の仲間は白髪混じりとなり、恩師は故人となっているのだが、もしも今一度みんなが一堂に会し

*18 ケースメソッドはハーバード・ロースクールで行われていた方式の移植という説は誰かの直感的感想が噂になって広がったものだろう。宗教領域から持ってきたことを隠すためのカモフラージュの可能性も想像されるが、それほど手の込んだ説とは思えない。

て、筆者の話聞いてくれたら、どう言うだろうか。恩師は「そういうことだったのか」と微笑むだろうか……。そこはかたなく幻を追いながら攔筆する。

<参考文献>

- Bartels, Robert (1962), *The Development of Marketing Thought*, Richard D. Irwin Inc.
- ベルグソン, アンリ著 / 矢内原伊作訳 (1965), 『思想と動くもの』, ベルグソン全集7, 白水社 (Bergson, Henri (1934), *La Pensee et La Mouvant*, Presses Universitaires de France)。
- —————著 / 平山高次訳 (1953), 『道徳と宗教の二源泉』, 岩波書店 (Bergson, Henri (1932), *Les Deux Sources et De La Religion*, Presses Universitaires de France)。
- Borden, Neil H. (1957), Note on the Concept of Marketing Mix, Harvard Business School.
- ————— (1964), "The Concept of Marketing Mix," *Journal of Advertising Research*, Vol.4.
- Borden, Neil H. and M.V. Marshall (1959), *Advertising Management — Text and Cases —*, Richard D. Irwin Inc.
- コンバース, P.D. 著 / 梶原勝美訳 (1985), 『マーケティング学説史概論—コンバース・先駆者達の回想—』, 白桃書房 (Converse, Paul D. (1959), *The Beginning of Marketing Thought in the United States with Reminiscence of Some of the Pioneer Marketing Scholars*; Bureau of Business Research, the University of Texas)。
- ハロッド, ロイ著 / 清水幾太郎訳 (1975), 『社会科学とは何か』, 岩波書店 (Harrod, Roy (1971), *Sociology, Morals and Mystery*, The Macmillan Press Ltd.)。
- 橋本勲 (1975), 『マーケティング論の成立』, ミネルヴァ書房。
- 肥田日出生編著 (1979), 『経済学とマーケティング学との対話』, ダイヤモンド社。
- —————著 (2006), 「流通経済学および流通経営学の総合理解」『経済研究』, (明治学院大学), 第135号。
- —————著 (2004), 「マズロー=ウィルソン欲求理論が含意するもの III」『経済研究』, (明治学院大学), 第129号。
- —————著 (2007), 『マーケティングミックスの論理』, 中央経済社。
- Howard, John A. (1957), *Marketing Management — Analysis and Planning*, Richard D. Irwin Inc.
- ————— (1963), *Marketing Management — Analysis and Planning (Revised Edition)*, Richard D. Irwin Inc.
- ————— (1973), *Marketing Management — Analysis and Planning (3rd Edition)*, Richard D. Irwin Inc.
- ジェイムズ, ウィリアム著 / 梶田啓三郎訳 (1957), 『プラグマティズム』, 岩波書店 (James, William (1909), *Pragmatism: A New Name for Some Old Ways of Thinking*, Longmans, Green, and Co.)。
- ————— (1969, 1970), 『宗教的経験の諸相 (上) (下)』, 岩波書店 (James, William (1920: Thirty-Second Impression), *The Varieties of Religious Experience. A Study in Human Nature. Being The Gifford Lectures on Natural Religion Delivered at Edinburgh in 1901-2*)。
- 加藤勇夫 (1982), 『マーケティング・アプローチ論—その展開と分析—』, 白桃書房。
- 小原博 (1987), 『マーケティング生成史論』, 税務経理協会。
- MacCarthy, E. J. (1971), *Basic Marketing — A Managerial Approach — (Fourth Edition)*, Richard D. Irwin Inc.
- ミード, S. フランク著 / 鹿嶋春平太訳・解説 (2017), 『バプテスト自由吟味者』, 編集工房 DEP (Mead, Frank S. (1954), *The Baptists*, Broadman Press, Nashville, Tennessee)。
- 光澤滋郎 (1990), 『マーケティング論の源流』, 千倉書房。
- ショウ, A.W. 著 / 伊藤康雄・水野裕正訳 (1975), 『市場配給の若干の問題』, 文眞堂 (Shaw, Arch W. (1915), *Some Problems in Market Distribution*, Cambridge, Massachusetts Harvard University Press)。
- ウェーバー, マックス著 / 出口勇蔵訳 (1962), 「社会科学および社会政策の認識の『客観性』」『ウェーバーの思想 (世界大思想全集18)』, 河出書房新社。